

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第52回 妻の闘病を振り返って思うこと—抗がん剤の恐ろしさ—②

ここから4年10ヵ月、ニオンで違う治療方針を妻の抗がん剤との付き合い合いが始まった。主治医の驚いた厳しい顔は忘れられない。セカンド・オピニオンで違う治療方針を受け入れてもらえなかった。なんとか説得し、広島方式(タキソール+パラプラチンの2種

厳しい抗がん剤の副作用

混合)を受け入れてもらえた。

1年数ヵ月、この抗がん剤との付き合いは続いた。結果は順調だったが、同じ薬は何時までも継続して使えなかった。次に使いたしたのは薬剤イレッサ。投与する毎に300を超えていた腫瘍マーカー(CEA)は半減を繰り返し、本人は勿論、家族も大喜びした時期があった。腫瘍マーカー(CEA)は20台まで減少したがその後、最悪の肝機能障害を引き起こし、緊急入院となった。生死の境を4〜5日彷徨った結果、何とか生かされたが、薬剤の怖さを知った。

しばらくは抗がん剤を中止せざるをえない期間が続いた。元々体力に自信を持っていた妻だったから回復も早かった。3ヵ月後また抗がん剤を開始。タキソール、ジェムザールと続いたが、長続きはしない。最後に使ったのが新薬のアリムタ。厚生労働省で承認されて3ヵ月しか経っていない薬剤だった。勿論地元病院では初めて使う薬だった。

地方病院では12ヵ月ほどは新薬は使わず様子をみるのが普通。当然当病院も様子を見ることになっていったが、無理を言っていた使用許可を頂いた。妻は今回の入院を初めて拒んだ。もう退院は出来ないうことを察知したのかも

しれない。なんとか説得して入院させたが予想通りになってしまった。年末から新薬のアリムタを使いだったが、この1度きりになってしまった。薬が強すぎたか、体力がなかったか。

翌年3月医師から私と娘は「余命2週間」と宣告を受けたが、たった1週間の命だった。抗がん剤は無暗に使うべきではないと実感した。妻は「がん」ではなく、抗がん剤の副作用で死んだと今でも思っている。こんなに多くの抗がん剤を使用していなければもっと長生きしたであろうに。私のこの思いは墓場まで持っていくことになるだろう。